
夏の大三角形

隠れsugar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の大三角形

【Nコード】

N3084N

【作者名】

隠れsugar

【あらすじ】

チャットで知り合った「シオ皮」という女の子とオフで会うことになった。

…だけど、引越す前の友達を巻き込んだせいでおかしなことに…

（前書き）

若干ミステリーテイスト？

お断り

本文には誤り（？）があります
要するに4文目とか4文目とか4文目とかです。

しかしながらこれを肝に書いているので直せません。
すいません。

夏の夜空に輝く大三角形をご存知でしょうか？
こと座のベガ、わし座のアルタイル、はくちょう座のデネブ。この
3つの星を結んでできる三角形の事です。
ちなみに、ベガは織姫、アルタイルは彦星です。
そして、デネブが2人を結ぶカササギなのです。

「ただいま」

誰もいない家の中に向かって一応声を掛けておく。

学校から帰って一番最初にすることがパソコンの電源を入れること
になったのはいつのことだろう？

小5…いや小6か。両親が共働きになってからすぐのことだったはずだから。

—そんなことはどうでもいい。いや、どうでもいい問題というわけ
ではないけれど、今これからパソコンをするのに関係のある話じゃない。

既にお気に入りに登録されているチャットルームへアクセスする。
午後4時47分。そろそろ彼女(?)もやってくるころだ。

帰宅部であり、中学校が家から徒歩7、8分のところにある訳だから、ぼくが帰宅するのはいつも4時半過ぎくらいになる。

それからパソコンの電源をつけてメールチェックとかをしているうちに5時になってチャットを始める。

ITYCが入室しました

シオ皮が入室しました

ITYC：こんー

シオ皮：こんー

シオ皮：相変わらず毎日ここにきてるのね

ITYC：他にすることもないですし

チャットの相手である「シオ皮」という人物がおそらく女で、中学生が高校生であることまでは分かっている。

シオ皮さんにとっての僕にしてもまたしかり。

以前、英語の宿題がどうのこうの、と言った話をしていたことがあるからだ。

でも、学年までは分からないので、中学2年である僕は一応敬語を使うことにしているし、相手もそうしている。

ネット上で話すときは人間同士の距離感はそのくらいがいいのかもしれない。

シオ皮：学校の方は相変わらず？

ITYC：まあ、そうですね

シオ皮：で、まあ何度も言ってるし無駄だと思うけど、ITYC君はそれでいいの？

ITYC：「量より質」ですよ

シオ皮：前と全く同じ返事をするのね

僕は学校では友達が多いほうではないが、やはり多ただけの友達付き合いは疲れる。

少数精鋭。それに昨今は良くも悪くもインターネットという便利な代物があるので話相手には事欠かない。

しばらく学校の事について雑談を交わす。

シオ皮：ところで、今までこんな話したこと無かったけど、ITYC君はどこに住んでるの？

さて、どうしたものかと一瞬悩んだが、ネットでの知り合いにリアルの事を必要以上に教える気にはなれない。悪いと思いつつも嘘をつかせてもらった。

ITYC：東北地方の。。。県の県庁所在地ですね

実際小5までは住んでいたのだから多少突っ込まれてもぼろが出ることはないだろう。

小6になる春に父親の転勤で関西圏の 県のこの町にやってきた。

シオ皮：へー。じゃあ私とすぐ近くだね。私は隣の市

ITYC：そうなんですか

シオ皮：じゃあ、せっかく近いんだし、今度オフで会ってみない

さすがにこれに即答はできない

ITYC：10分くらい時間ください

シオ皮：OK

時計を確認する5時54分。もう部活も終わる時間だろう。

あいつが未だに部活動をまじめにしていたとしても。

とりあえず携帯を取り出し久しぶりの番号に掛ける。

相手はワンコールで出た。

「あー俺、俺」

切られた。

めげずに掛けなおす。

「さつきは悪かった。スイマセンデシタ」

「ったく。カイト、お前は相変わらず無駄なことするよな」

「まあ、それもいいじゃん。カズキ、その無駄がお前にとってプラスになるかもしれないんだからさ」

「お前の無駄が俺のプラスに？500kmを超えて？」

「ああ、なるなる」

僕は事のあらましを話した。

「なるほどね。で、俺にお前の代わりになれと」

「そうそう。じゃあもういいね。詳しく決定し次第もう一回連絡する。恩に着るよ。じゃあな」

「ちよつとまで俺は返事をしてな」

切りボタンを押して通話終了。カズキが最後に何か言いかけてたような気もするがきつと気のせいだ。

ITYC：まあ、いいでしょう。で、何時何処で如何にして会いますか？

シオ皮：わざと漢字を使う必要ないでしょ、そこ

ITYC：まあ日付はあさってー今度の日曜日でもいいでしょう。場所。○。駅でいいですか？

○。駅は、県庁所在地にある新幹線の止まる駅だ。

シオ皮：日付の方は私に選択権はないの？まあ、いいけど。場所もいいわ

ITYC：方法は…そうだな。こんなものではどうでしょう？

ITYC：僕が10時から正午まで駅内のマックにいます。窓際の席でつば付きの帽子をかぶって

ITYC：シオ皮さんはそれを見た上で僕と会うか会わないか決めてください

シオ皮：私から言い出したのに会うか会わないか決めるもないでし

ようw

シオ皮：ところで君のHNの「ITYC」って何て読めばいいの？
ITYC：あ、そうか。ネット上でしか使っていないから読むときの
事考えた無かったな…

シオ皮：英語的に読むならイチークがイチュークくらいが妥当かな
？

ITYC：じゃあ、イチュークでいいです。シオ皮はんはシオカワ
でいいんですか？

シオ皮：うん。OK

シオ皮：じゃあそういうことで。今日はもう落ちます。眠い

ITYC：お疲れ様です

シオ皮が退室しました

ITYCが退室しました

「という訳だ。あさってはよろしく」

「開口一番」という訳だ』と言いだす奴とかそれこそどういう訳だ。
にしても明後日とは急だな」

「お前ならいつでも暇だろうと思って。早いうちに仕事は済んだ方
がいいだろう？」

「先約があったらどうするつもりだったんだ、という意味で言っ
てる」

「ここで『俺のことなら最優先でやってくれると信じてるから』っ
て言ったらどうする？」

「そうだな。とりあえず即通話を終了して、お前の携帯番号とメー
ルアドレスを電話帳から削除だな」

「かといって事実も言にくい。お前のような奴に日曜日に先約が
入っているはずがない」

「言いにくい、って言いつつばっちり言ってやがる。はいはい、ど
うせ俺は」

「『お前と同じくらいしかモテませんよ』って言うつもりだったな

ら電話切るぞ」

「切って困るのはお前だ。それに俺は『お前ほどもてない』と言おうと思ってた。人の謙遜を無駄にする天才だな、お前は。あ、相変わらず、な」

「さて、無駄話はこのくらいにしてあさつての詳しい打ち合わせだ。とりあえずお前の名前はイチユークだ」

「イチユーク？そりやまた変な名前を付けたもんだ」

「アイ・ティー・ワイ・シー。ITYCを無理矢理英語読みしてイチユークだ」

「ITYC、ITYC…ああ、なるほどそれでカイトか。安直な謎を作るのも相変わらずだな」

「安直で悪かったな。それに、これは名前として使ってるもので、別に謎かけにしたわけじゃない。にしても10秒で解くか普通？」

「厳密には7秒だと思うが。で、相手の名前は？」

「シオカワ」

「塩の川か？」

「いや、カタカナでシオと書いて、その後に皮膚の皮だ」

「シオ皮、シオ皮…。シオ皮か…。それは女か？」

「だからお前に話を振ってやったんだろ」

「お前はまず自分の心配した方がいいと思うんだがな。そんなことはどうでもいいか。シオ皮ねえ…。じゃあ多分思考回路はお前と似てんだろうな」

「どういう意味だ？」

「名前の作り方が似過ぎ」

「は？」

「まさかお前、相手の本名分らないんじゃないだろうな？」

「いや普通ネット上じゃ分からんだろ」

「そうじゃなくてハンドルネームから」

「わりい、分からん」

「お前は俺と離れてから日々退化してないか？」

「そりゃ最上級のほめ言葉だね」

「せっかく人が論理的思考というやつを教えてやったのに」

「人はそれを屁理屈という」

「ま、とにかく俺に感謝するんだな。結果報告は『デート』が終わってからでいいか」

「ああいいさ『オフミ』が終わってからで」

カズキは僕が引越す前、小学校時代の親友だ。

お世辞にも性格がいいとは言い難い。それでも僕とは波長が合うように、仲良くなった。

頭が切れる上に、謎解き、謎かけの大好きなやつだ。

今もその性格は相変わらずだ。

向こうの友達のうち今でも連絡を取り合う数少ない友人の一人だ。

まあ、その性格から頻繁ではなかったけれど。

それが今回思わぬ方向で役立った。

…まあ、シオ皮さん本人に僕が会えないのはちょっと残念だけど。

「という訳だ。おやすみ」

日曜の夕方。カズキから届いたメールはわずか1行のそっけないものだった。

僕は、パソコンでのタイプは早い方だけれど、携帯では早くない。

面倒なので電話をかける。

「おはようございます。カズキ様。モーニングコールを差し上げました」

「俺はそんなもの頼んだ記憶なんかないがな」

「なことはどうでもいい。で、今日はどうだった」

「うーんとだな。一言でまとめるなら『楽しかった』よりは『面白くなりそうだった』の方が近いかな」

「どういう意味だ？俺程度の能力しか有していない人間でも分かるように説明してくれ」

「つまり、相手も偽物だったのさ」

「頭の中にはてなマークが出る。会おうと話を振ってきたのは彼女の方のはずだ。」

「あ、そうか。先に自分の居場所を言ったのが僕の方だから、シオ皮さんは僕に合わせて返事をしたんだ」

「多分それが妥当なところだな」

「で、偽物はどうだった」

「そうだな…。サクラさん、って名前だった。中2。同い年だ。『楽しそう』より『面白そう』な人だったからありがたくありがたがつとくよ」

「お前はまず日本語の勉強をして語彙を増やすべきだな」

「とにかく、そういう訳だ。明日の夕方にも本人と話をするんだな。ちなみにこっちも偽物だって言うのも相手は分かっているから。」

「じゃ、そういうことで俺の仕事は終わりだな。じゃあ後は頑張れよ、夏の大三角形をなすわし座のアルタイル君よ」

切られた。

夏の「大三角形」？アルタイル？あの、彗星のあれか？何でそれがここに出てくる？

どう考えてもこれはあいつお得意の謎かけだな。

さて、考えてみますか。

謎が掛けられたシチュエーションから考えるに、ベガ、織姫がシオ皮さんに掛けられているのだろう。

となると、すぐに答えは分かる。

僕の住んでいる街には大きな川が流れている。

その名も大川。おおかわ

が、僕らは専らダイガワと呼んでいる。まあ、クラスに大川と書いてオオカワという名字のやつがいるからというのが一番の理由では

あるけど。

で、その大川は街の北東から南西に向かって真つすぐ流れている。川の北側を北町、南側を東町、と呼んでいる。

そして、僕は東町に住んでいる。

なぜ「北町と南町」でないのか疑問だが、今回は関係ない。

…ここまでは地図を見ればカズキでも分かる。

ということとは、だ。

多分あいつは、この大川を天の川に見立てて夏の大三角を地図上に書いた訳だ。

となるとおそらくシオ皮さんは川の対岸、北町に住んでいるのだろう。

この推理には「カズキがシオ皮さんの住所を知っている」という前提がつくが、それくらいは多分どうにかなるだろう。多分、お互いが偽物だと分かった時点で本物の居場所について話をしたのだろう。

あいつにしては簡単な謎を掛けたものだ。

ITYCが入室しました。

シオ皮が入室しました。

ITYC：こん—

シオ皮：こん—

ITYC：日曜日は楽しかったですね

シオ皮：それは私に対する嫌味かな？

ITYC：いやいや、とんでもない。そこはお互いさまなので。

ITYC：あ、そうそう。もし差し支えなければお聞きしたいんですが

ITYC：サクラさん、昨日星の話してました？

シオ皮：星の話？どういう意味？

ITYC：いや、してないならいいんです。こつちの話なので

ということは、アルタイルの謎かけはカズキが1人で考えたのか。

ITYC：じゃあ、もうひとつ質問いいですか？

シオ皮：常識の範囲内ならね

ITYC：あなたは 県北町に住んでますよね？

しばしの沈黙

まずかったかな、と僕が思い始めるころようやく返事が返ってきた。

シオ皮：なるほど、サクラがカズキ君に話して、カズキ君がITYC君に教えたのね

ITYC：いえ、違います。あいつは性格がひねくれてるんで教えてくれませんでした

ITYC：代わりに「頑張れ夏の大三角形のアルタイル」と言われました

シオ皮：アルタイル？

ITYC：彦星です

シオ皮：なるほど。じゃあ君は東町に住んでるわけだ

ITYC：そういうことです

シオ皮：でも、「彦星」じゃなくて「夏の三角形」って言うくらいなんだから「デネブ」は何？

そう、そこは僕も気になっていた。

ITYC：何でしょうね

シオ皮：デネブってほくちよう座よね？

ITYC：多分。まあ、織姫と彦星渡したのはカササギですけどね

シオ皮：あれ？そのカササギとはくちよう座と同じじゃない？

ITYC：そうなんですか？

シオ皮：多分ね。

シオ皮：なら、デネブはスワンボートかな？

ITYC：スワンボート？

シオ皮：ITYC君が東町のどの辺に住んでるのか知らないけど、大川の下流の方にスワンボートに乗れる場所があるのよ。多分そこね

ITYC：なるほど

シオ皮：じゃあ、来週今度はそこで会うつていうのはどう？

ITYC：昨日と同じように

シオ皮：うん、あそこにもマックはあったしね

ITYC：来週の予定もできたことですし今日はそろそろ落ちますね

シオ皮：はいはいお疲れ〜

ITYC：お疲れ様です

ITYCが退室しました

シオ皮が退室しました

当日午前10時。約束通り僕はマックにいた。

つばつきの緑の帽子をかぶって、文庫本を片手に。

ハンバーガー1つとドリンク1杯で2時間も居座られるのは店側もいい迷惑だろう。

さて。テーブル席に腰を下ろし文庫本を開く。久しぶりに推理小説を読むことにする。

文庫本300ページ。約束の正午まで2時間読んで終わるか終らないかだろう。暇を持て余すことはない。

.....

…

…

まだ、小説の中にすべての登場人物も出そろわないころ―時刻で言うなら10時10分ごろ―シオ皮さんはやってきた。

僕が想像していた彼女とは大分違った。

分類するなら可愛い系、だろうか。

男子の標準身長より数cm低い僕より10cm近く低い。

化粧やファッションにそれほど気を使うタイプではないようだけど、どこことなく上品な雰囲気漂っている。

チャットで話ただけでは、よくいえば面倒見のいい人、悪く言えばおせっかいな人かと思っていたけれど。

いや、人を見かけで判断してはいけない。

「イチユークさんですか？」

「はい。シオ皮さんですね？」

一瞬「さん」で呼ばれたことに戸惑ったのをシオ皮さんには悟られなかったようだ。

「大分イメージしていたのと違いますね」

「そうですね。でも、どちらかというとあれが素ですね
やっぱりか。

「イチユークさんはあんまり変わりませんね」

「そうですね？」

とは答えたものの、僕は意識して違う人格でネットに挑んでいるつもりだった。

「シオ皮さんはサクラさんと同じ中学2年ですか？」

「ええ。イチユークさんもですよね？」

「そうです」

「じゃあ、同じ年何で敬語使うのはやめませんか？」

「そうしましょうか」

「ところで、せっかくここまで来たんだからスワンボート乗らない？」

敬語使うのやめようと言った直後にタメで話す…。やっぱり、ネット上のシオ皮さんが素のようだ。

スワンボートにのれるこの湖が近所では有名なデートスポットであるということとはリサーチ済みだ。

この辺は関西圏とは言っても田舎の方で、あまりそういうところはない。

アウトドア派ならここ、インドア派なら映画館くらいしか行くところがない。

まあ、電車に15分も乗れば立派な遊園地に着くんだけど。

まだ素性の分からない男の子と2人でボートに乗ろうというのはちよつと不用心すぎるんじゃないだろうか？

それとも、僕程度が相手なら返り討ちに合わせることができるのかもしれない。

とは言っても、やっぱりちよつとドキドキする。

「チャットで話すのと会って話すのではやっぱりちよつと違うね」

「そうだね…」

ボートの上、シオ皮さんと肩を並べてボートのペダルをこぐ。

体力には少しだけ自信のある僕の息が上がるのが早い気がするののは気のせいじゃないはずだ。

「先週の事だけど、シオ皮さんとサクラさんってどういう関係？」

「えつとね、サクラもおとしまでここに住んでたんだけど、中学に上がる直前に引っ越したの。でも、まあ、友達関係に距離は関係ないけどね。イチユーク君とカズキ君は？」

「シオ皮さんのちょうど反対。僕が小6の時向こうから引っ越してきたんだ。その時の友達」

「ふ〜ん」

ちよつとだけ気になっていたことがあったので聞いてみた。

「シオ皮さんは、サクラさんの事があつたとしても、先週なんで僕に話を合わせたの？」

「その時は、イチユーク君が本当に東北に居ると思ってたの。で、私はここに住んでるからそこまで行くのは無理でも、せつかく会おうって方向で話が進んだから会いたくないじゃない。その時サクラの事思い出したの。イチユーク君の方は『来なくても構わない』みたいなことを言ってたから、じゃあダメもとでサクラに頼もうって思ってたの」

「で、サクラさんは話に乗ってくれた、と」

「うん。そうなんだけど、イチユーク君の方は？途中返事を待ってて言っただのはカズキ君と話をつけるためね？」

「ま、そういうこと。あの時は、まだシオ皮さんと本当に会うべきかー会うに値するかという意味じゃなくてーに結論を出せなかったから逃げた、つていのが本音だけど。せつかく会おうって言うてくれたのに悪いことしたと反省してる。ごめん」

「いいいよいよ。私だって今日ここにきてイチユーク君の姿見るまでは会おうかどうか迷ってたもん。自分で言いだしといてなんだけどね」

それが、普通の人間の行動だと思う。

「ところで、イチユークさんハンドルネームの由来は何？」

「？どうしたの急に？」

「いや、『イチユーク君』って呼びにくいなって思って。良かったら名前教えて」

「あ、それで思い出した。先週カズキに話をした時のことなんだけど、まああいつあれでも頭が切れる奴だから僕のITYCつていうハンドルネームの由来は10秒ほどでばれたんだ。で、シオ皮さんの事も言ったら、しばらく…多分30秒弱くらい考えてから『ハンドルネームの作り方がお前とそっくりだな』って言った。でも、僕は未だにわからない」

「じゃあ、先に相手のハンドルネームを当てた方が当てられた方に

ジューズ一本奢ること。さて、私もまじめに考えよ」
完全にシオ皮さんのペースだな。まあいいけど。
推理は嫌いじゃない。

5分ほど2人とも無言で考えていた。

「あ、そういうことか。なるほど『お前とそっくり』か」

「え？わかったの？」

「うん。多分…」

「私の名前は？」

「ナオミさん、かな？」

シオ皮さん（まだナオミさんと決まったわけじゃないのでこう呼んでおく）はなんとも読めない表情をしている。

「……正解」

良かった。

「僕は本名をカイトっていうんだ。カイトの最後のトを最初にしたら「都会」で、英語にしてCIITY。最初にした最後の文字をもとにもどしてITYC。まあ、こういう訳。で、これと作り方が似てるということは」

変換と並び変えを使っているんだろう。シ・オ・皮の3文字を良く見ると「シ皮」が「波」になる。

ということは「なみ」の間に「オ」が入ってナオミ。と、こう推理したわけだ。

良かった。まだ鈍ってないようだ。

「そうゆうこと。じゃあ、今度からナオミさんでいいかな？」

「いいよ。そのかわりジューズは無しね。カイト君」

ナオミさんはわざとらしくそう言って笑いだした。

夕方。ようやく家に帰り着く。

今日は疲れた。とはいっても、それは「ボートを漕ぐ」という運動をした結果の心地よい疲労だ。

精神的な意味でも疲れはしたが。

とりあえず、うまく僕を操ったつもりになっているカズキには連絡を入れておかないといけない。

こういうときは電話よりメールの方が楽だ。

「天の川の謎かけお疲れ。お前にしては簡単だったな。『ナオミさん』いい人だったよ。話に聞くサクラさんに負けず劣らず。まだお互い正式にそういうことにはなっていないようだけど、今度正月にでもダブルデートと行きますか（殴るなよ笑）じゃあ」

送信…しようとして手が止まる。

スワンボートの事をこいつは知っていただろうか？

こいつは一度もここに来たことが無いのだ。

それなのに僕すらも知らない湖のスワンボートを知っていたのだろうか？

確かにサクラさんの知恵を借りればできたかもしれない。

でも、サクラさんがナオミさんに星の話をしなかったということは、あの謎はカズキが1人で考えたものだ。

なら…デネブは何だ？

………

………

………

………

………

ネットサーフをすること30分。ようやく目的の記述にたどり着いた。

なるほど。確かにこれはうまい謎だ。

僕は先ほど送信を思いとどまったメールの最後に1文加えて送信した。

「夏の大三角形をなすはくちょう座のデネブ君よ」

地球からベガまでは約25光年、
アルタイルまでは約17光年です。

織姫と彦星

そこから計算すると2人は約15光年の距離を隔てた恋愛をしていることになります。

ところが、2人を渡すカササギであるデネブは地球から約1500光年の距離にあります。

つまり彼ら2人は出会ったためにとても遠くにいる人（鳥ですが）に
応援を頼んでいるのです。

これはもしかしたら人間にもおきかえられるんじゃないでしょうか
（笑）

(後書き)

http://detail.chiebukuro.yahoo.
co.jp/qa/question/detail/q1345
349893

→4文目の事についてはYAHOOでも聞いたんですが、分かりません。

誰か真偽の分かる方いらっしゃいませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084n/>

夏の大三角形

2011年1月26日10時11分発行